川久保Ｂ遺跡２

―２次調査―

福岡県春日市下白水北所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第65集

２０１２

春日市教育委員会

川久保Ｂ遺跡２

― ２次調査 ―

福岡県春日市下白水北所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第65集

２０１２

春日市教育委員会

序

春日市の中央に延びる春日丘陵の北部一帯には、奴国の王都とされる須玖岡本遺跡が広がっており、他に類を見ない王墓や青銅器生産工房群が確認されています。

一方、春日丘陵の西に広がる台地では、近年、弥生時代の青銅器生産に関する発見が相次ぎ、弥生時代から歴史時代まで続く複合遺跡ということが明らかになっています。特に古墳時代は日拝塚古墳などの前方後円墳が多く存在し、古墳時代の集落跡も徐々に明らかになりつつあります。

川久保B遺跡も、上述した台地上に広がる遺跡で、弥生時代から中世までの遺構・遺物が確認されています。今回報告いたします2次調査は狭小な範囲ではありましたが、古墳時代前期の住居跡を検出することができました。川久保B遺跡周辺は宅地化が早かったために遺跡の性格については、殆ど明らかにされておらず、その意味でも今回の発掘成果は意味のあるものであったと考えます。

貴重な遺跡の発掘調査報告としましては、本書の不十分さは免れませんが、研究資料として末永く活用され、また、一般の方々にも広く利用していただければ幸いです。

なお、最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御協力、御指導を賜りました方々に心から感謝の意を表します。

平成24年3月31日

春日市教育委員会
教育長　山　本　直　俊

例　　言

1．本書は、2005年11月７日から11月16日にかけて春日市教育委員会が実施した、個人専用住宅建築に伴う川久保Ｂ遺跡２次調査の緊急発掘調査の報告書である。

2．遺構の実測は、井上義也・坂田邦彦が行い、製図は伊東ひかりが行った。

3．遺物の図作成は、井上・島津屋幸子・川端美由紀・造隼いずみ・久家春美が行い、製図は柳智子・島津屋・久家が行った。

4．掲載写真のうち遺構については井上が撮影し、遺物については岡紀久夫(文化財写真工房)が行った。

5．本書に使用した２万５千分の１地形図は、国土地理院発行の『福岡南部』である。

6．本書の遺構実測図に用いた方位は、座標北である。

7．本書の執筆は井上が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査の組織……1

Ⅱ　位置と環境……2

Ⅲ　調査の内容……5
1．調査の概要……5
2．遺構と遺物……5
（1）竪穴住居跡……5
（2）ピット……9

Ⅳ　まとめ……10

図 版 目 次

図　版　1　（1）　川久保Ｂ遺跡２次調査区全景（北東から）
（2）　竪穴住居跡（南東から）
図　版　2　（1）　竪穴住居跡東西土層
（2）　竪穴住居跡南北土層
図　版　3　（1）　竪穴住居跡炉跡半裁状態（南西から）
（2）　竪穴住居跡Ｐ１断面土層（北東から）
（3）　竪穴住居跡Ｐ２断面土層（北東から）
図　版　4　　竪穴住居跡出土土器・鉄器

挿 図 目 次

第１図　川久保Ｂ遺跡周辺遺跡分布図……3
第２図　川久保Ｂ遺跡位置図……4
第３図　川久保Ｂ遺跡２次調査遺構配置図……6
第４図　竪穴住居跡実測図……7
第５図　竪穴住居跡出土土器実測図……8
第６図　竪穴住居跡出土弥生土器実測図……8
第７図　竪穴住居跡出土鉄器実測図……9

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

平成17年９月、下白水北５丁目120番、121番の一部に個人専用住宅建設計画の打診を受けた。当地は川久保Ｂ遺跡の南端部に位置し、南側80mには下白水大塚古墳が存在する。遺構の有無を確認するため10月24日に確認調査を実施したところ、地表面から約120㎝でピットを確認した。

地権者と春日市教育委員会で埋蔵文化財保護に関する協議を行い、遺構に影響を与える住宅建築部分を中心に22.96㎡を市の単独事業として緊急発掘調査することになった。

発掘調査は、平成17年11月７日から11月16日まで行い、遺物の整理作業及び報告書作成は、平成23年度を中心に行った。

2．調査の組織

発掘作業および整理作業における調査体制は下記のとおりである。

発掘調査（平成17年度）			報告書作成（平成23年度）		
教育長		山本　直俊	教育長		山本　直俊
社会教育部長		鬼倉　芳丸	社会教育部長		古賀　俊光
文化財課長		結城　康雄	文化財課長		廣瀬　貴之
管理担当	統括係長	戸渡　　隆	管理担当	課長補佐	平田　定幸（～４月）
	主　　査	塩足　雅弘		主　　査	益永　睦司
	主　　事	松竹　典子		主　　任	山田ひとみ
				主　　事	佐伯　廣宣
文化財担当	統括係長	丸山　康晴	文化財担当	統括係長	中村　昇平
	技術主査	中村　昇平		主　　査	吉田　佳広
	技術主査	吉田　佳広		主　　査	森井千賀子
	技術主査	森井千賀子		主　　任	井上　義也
	技術主任	境　　靖紀		嘱　　託	島津屋幸子
	技術主任	井上　義也		嘱　　託	柳　　智子
	嘱　　託	坂田　邦彦		嘱　　託	上原　あい
	嘱　　託	河村　麻子			

Ⅱ　位置と環境

川久保Ｂ遺跡は、福岡県春日市下白水北１・５丁目と福岡市南区にかけて広がる遺跡で、今回の２次調査地は下白水北５丁目120番、121番の一部である。

当遺跡は、福岡平野の西部を博多湾に向かい北流する那珂川の右岸に形成された中位段丘上に存在する。この中位段丘では、多くの遺跡の存在が推定できるが、当遺跡周辺は春日市と福岡市の市境付近に位置するため、両市の遺跡分布図が錯綜しており、今後、調査の増加による両市の遺跡分布図の突合せの必要性がある。

川久保Ｂ遺跡周辺に目を向けると段丘北端に位置する御陵遺跡では、少ない調査面積にも関わらず弥生時代の青銅器鋳型や坩堝等の青銅器生産関連遺物が出土していることは特記される。また、御陵遺跡の西側に位置する野藤遺跡では、現在までに青銅器生産に関するような遺構は検出していないが、古墳時代以降の遺構や包含層より石製鋳型等が出土している。さらに、両遺跡の北側の低地で確認された福岡市笠抜遺跡では弥生時代中期末から後期にかけての貯水遺構等の灌漑施設が調査されており、まとまった点数の銅矛中型が出土している。

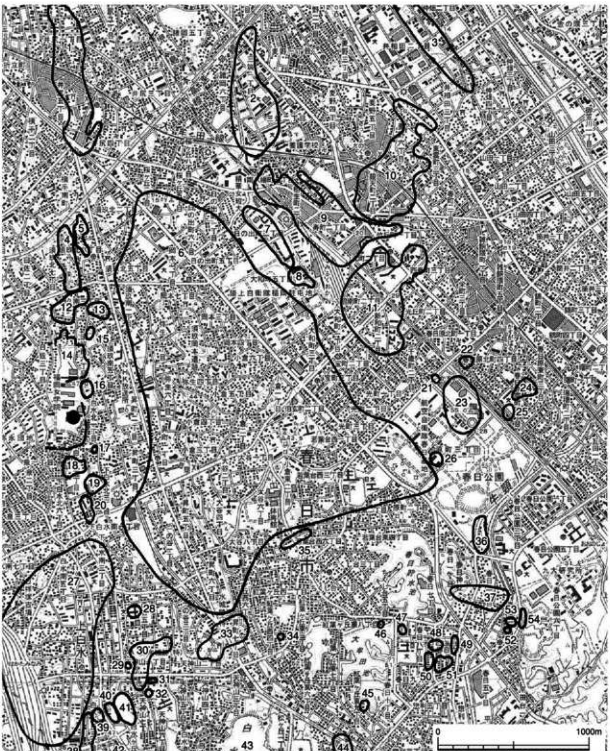
以上のように御陵遺跡一帯では、ある程度の規模で弥生時代に青銅器生産が行われたと推測でき、東に隣接する須玖遺跡群との強い関連性が想定される。

野藤遺跡の南側に位置する浦田遺跡は調査例が少なく青銅器生産に関する遺物等は発見されていないが、川久保Ｂ遺跡との間にはガラス勾玉鋳型や内行花文鏡が出土した弥永原遺跡群も存在する。各遺跡の性格は類似し、立地的にも分けがたいものもあることから、一つの遺跡群として捉えても問題はなかろう。

このことは、古墳時代についても同様で、大規模な集落は確認されていないが、各遺跡で古墳時代前期の住居跡が検出されている。また、当段丘には、北から初期の前方後円墳と推察される墳長約30ｍの御陵古墳、詳細が不明だが前期古墳の可能性がある野藤２号墳、周溝から埴輪が出土した墳長47ｍの野藤１号墳、川久保Ｂ遺跡２次調査地点の南80ｍに位置する下白水大塚古墳等各時期の前方後円墳が存在する。

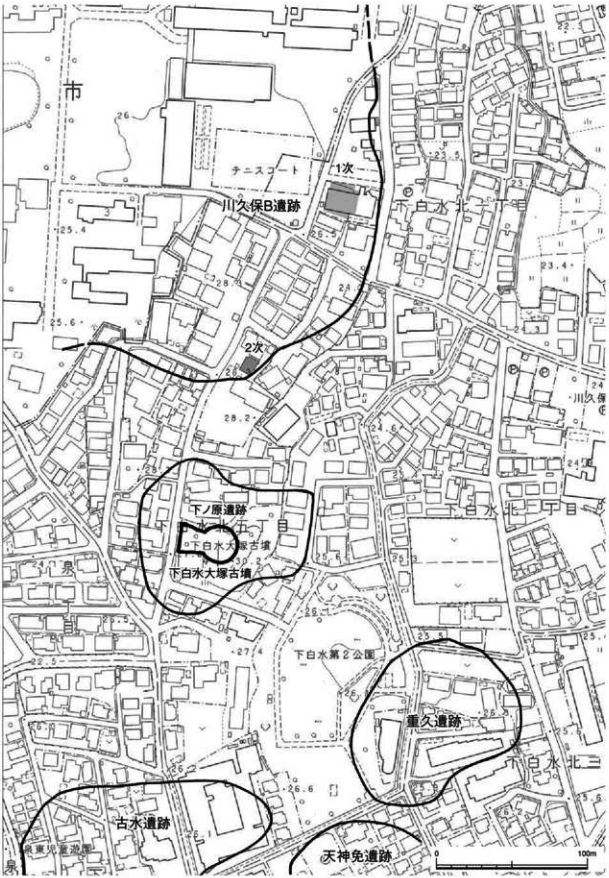
古代・中世については、詳細は明らかになっていないが、溝状遺構や墳墓等が一部で確認されており、貿易陶磁等が出土する。また、須玖地区には字で中世の安楽寺領である武末名の故知とされる「竹末」等があり注目される。

さらに『筑前国続風土記』によると川久保Ｂ遺跡の南方には、天浦城が築かれていたとされる。天浦城は筑紫広門の重臣である島鎮慶の居城とされるが、現在までの発掘調査や試掘調査によって堀などの痕跡は明らかにされていない。



● **川久保Ｂ遺跡**　1 井尻Ｂ遺跡　2 三筑遺跡　3 仲島遺跡　4 野藤遺跡
5 御陵遺跡　6 須玖遺跡群　7 下大荒遺跡　8 大荒遺跡　9 南八幡遺跡
10 麦野Ｃ遺跡　11 雑餉隈遺跡　12 浦田遺跡　13 上ノフケ遺跡　14 古野ノ上遺跡
15 林添遺跡　16 川久保遺跡　17 重久Ｂ遺跡　18 下ノ原遺跡　19 重久遺跡
20 天神免遺跡　21 原町遺跡　22 駅河Ｄ遺跡　23 駅河Ａ遺跡　24 駅河Ｅ遺跡
25 駅河Ｂ遺跡　26 先ノ原遺跡　27 上白水遺跡群　28 向野遺跡　29 池ノ内遺跡
30 天神山水城跡　31 池ノ内Ｃ遺跡　32 池ノ内Ｂ遺跡　33 大土居水城跡　34 小倉新池遺跡
35 小倉水城跡　36 前ノ原遺跡　37 春日水城跡　38 百堂遺跡　39 ウトグチＣ遺跡
40 ウトグチＢ遺跡　41 整理池遺跡　42 ウトグチＡ遺跡　43 白水池古墳群　44 楠ノ木遺跡
45 大牟田遺跡　46 大牟田池窯跡　47 惣利１号窯跡　48 惣利遺跡　49 惣利北遺跡
50 惣利西遺跡　51 惣利東遺跡　52 向谷西遺跡　53 向谷北遺跡　54 向谷遺跡

第１図　川久保Ｂ遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）



第２図　川久保Ｂ遺跡位置図（1/2,500）

Ⅲ　調査の内容

1．調査の概要

発掘調査の対象としたのは、確認調査によって遺構を検出した対象地東側の個人専用住宅の建築予定地である。平成17年11月７日から調査を開始したが、面積が狭小であったために客土等を対象地の中に仮置きすることは不可能であったため、西側からトラックを使い外へ持ち出すことにした。このため東側からバックホーで表土を除去しながら遺構検出作業を順次進めていった。

現況では専用住宅の庭となっていたが、掘削を進めていくと造成前の構造物などが確認された。人力による遺構の掘削土の置き場や、過去の構造物により遺構が破壊されていると考えられること、さらに、調査の安全性も考え、住宅により遺構が破壊を受ける範囲よりも一回り狭い範囲を実際には調査している。

当地一帯は、宅地化が早かったため、これまでに十分な試掘調査のデータは得られていなかった。今回の調査は狭い範囲ではあるが、遺跡の性格や地形を確認できたことは大変意義があったと考えている。遺構検出面は、現地表面から120㎝から150㎝まで掘削した深さにあり、東側に向かい緩やかに低くなっていく。

恐らく、当該地は南北に長く延びた台地の東側緩斜面に当たると考えられる。発掘面積が限られた状況であったが、古墳時代前期の竪穴住居跡を調査することができた。平成23年３月に報告した１次調査では、古墳時代前期の住居跡等が確認されている。しかも、１次調査地は２次調査地と同じ台地の東緩斜面にあたる。このことから当台地の東斜面には古墳時代前期の集落が展開していたと考えて間違いない。

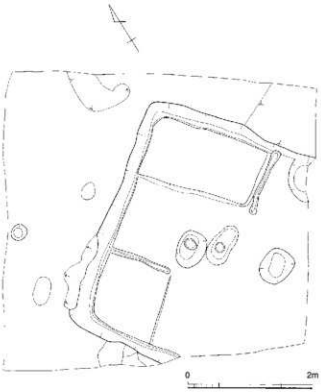
なお、出土遺物として住居に伴う古式土師器、鉄器の他に弥生土器、須恵器がある。遺構は確認していないため断定はできないが、今後の周辺の調査によって弥生時代や古墳時代後期の遺構が確認される可能性が十分にある。

平成17年11月16日までに発掘調査、借用器材の返却などを行い調査を終了した。

2．遺構と遺物

（１）竪穴住居跡（図版１～３、第４図）

調査区が狭小なため、全体のほぼ半分を占める。調査できた部分は全体の1/2強と考えられ、未調査部分が調査区南東側に延びる。西部と北東部の一部が攪乱を受けるが、残存状況はかなり良好で、最も残りの良い北西部は壁高が60㎝を測る。



第３図　川久保Ｂ遺跡２次調査遺構配置図（1/60）

床面には壁溝の他に、主柱穴、炉跡、屋内土坑、ベッド状遺構を確認した。壁溝は、調査できた壁下のほぼ全面を巡るが、屋内土坑には接続していない。幅は25㎝前後で床面からの深さは１～10㎝と一定ではなく、東側よりも西側が深い。

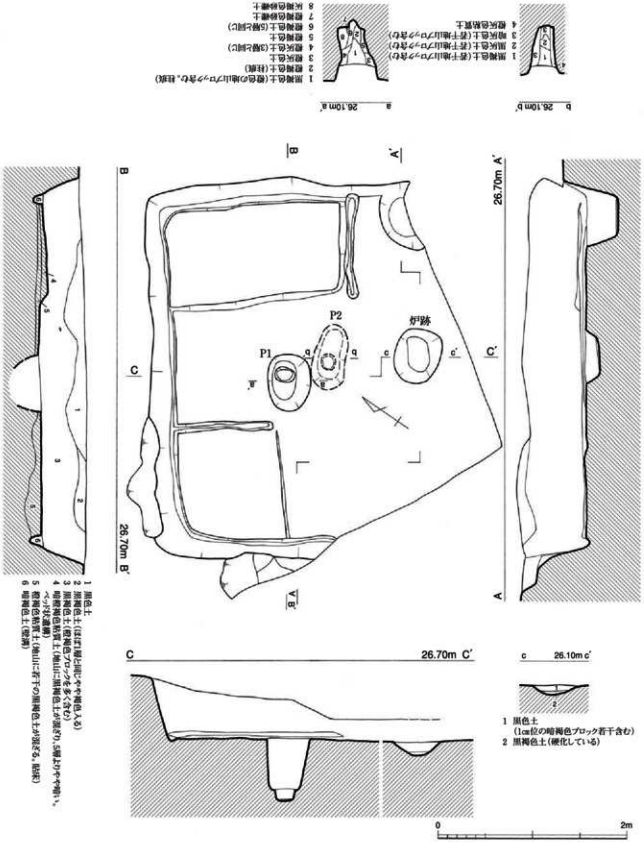
主柱穴は２つ確認した。これは新旧、つまり柱の建て替えを示しているものであり、同時に存在したわけではない。Ｐ１は、貼り床上面で検出した長径59㎝、短径45㎝の楕円形で、深さは64㎝程度。ほぼ中心に直径約20㎝の柱痕を確認した。Ｐ２は貼床下で確認した柱穴。平面形は、長径68㎝、短径34㎝の長楕円形で、深さは50㎝を測り、直径約15㎝の柱痕を確認した。

炉跡は、住居の平面プランや、ベッド状遺構・屋内土坑の配置から考えても住居の中央にあると推察できる。平面形は長径57㎝、短径48㎝とやや楕円形を呈し、深さは10㎝、周囲に炭や比熱による赤変、硬化は見られなかったが、底面は硬化していた。

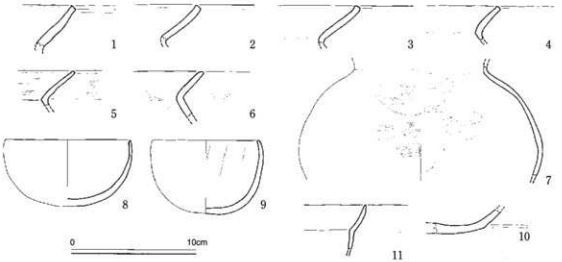
ベッド状遺構は、北隅と西隅で確認した。北隅のベッド状遺構は、105㎝×189㎝の長方形で、床面からの高さは８㎝前後。地山を削り出して成形したものではなく、地山である橙褐色土をベースに黒褐色土を混ぜ作り付けたものである住居中央に近い南東辺には幅10㎝、深さ10㎝程度の小溝が付随する。西隅のベッド状遺構は、平面形が110㎝×116㎝で、方形を呈する。東側に幅10㎝程度、深さ10㎝程度の小溝が存在するためにベッド状遺構と認識できたが、南側は床面との段差はほとんど見られなかったため、住居廃絶時には機能していなかったと考えられる。柱穴から見ても建て替えが行われたことは間違いなく、ベッド状遺構についても、当初、西隅のものを使用していたが、何らかの理由によって北隅に作り変えたために、床面と同じ高さまで削ったのではなかろうか。

屋内土坑は東側で検出した。調査区外まで延びているため平面形の詳細は不明だが、現況の深さは30㎝程度である。甕の胴部が出土した。

当住居跡からは土器の他に鉄器が出土している。



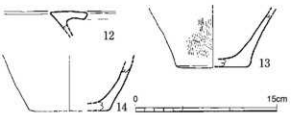
第４図　竪穴住居跡実測図（1/40）



第５図　竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

土　器（図版４、第５・６図）

１～６は甕の口縁部破片資料で、すべて床面から浮いた状態で出土した。１～３の口縁部はやや内湾し、調整はヨコナデを施す。３の下半には煤が確認できる。４は口縁部がやや外反気味に立ち上がり、端部を内側につまみあげる資料。５は直線的に外傾する口縁部で、内端部が肥厚するもの。口縁部は、最終的には内外面共にナデを施すが、外面にタタキ目、内面にはハケ目が残存する。胴部内面は、ヘラケズリ。６は口縁部が直線的に外傾し、口唇部上方に端面をもつもの。口縁部の調整はハケ目後ヨコナデ、胴部内面はヘラケズリ。天地が逆で、高坏の脚部の可能性も考えたが、ここでは甕の口縁部としておく。



第６図　竪穴住居跡出土弥生土器実測図（1/4）

７は屋内土坑から出土した甕の胴部上半で、小片のため傾きや復元径には疑問がある。風化が著しいが、調整は、外面がヨコハケ目、内面には横位のヘラケズリを施す。なお、肩部には波状文が確認できる。

８・９は鉢。８は1/3が残存する資料で、口径10cm、器高5.3cmに復元でき、口縁部は僅かに内湾する。風化のため調整は不明。色調は淡橙色で、胎土は粗細砂粒がやや目立つ。９はほぼ完形品。口径8.7cm、器高5.9cm。口縁部は僅かに内湾し、底部は丸底。調整は、外面は風化により明らかでないが、内面は工具痕が目立つ。色調は黄灰色を呈し、胎土は粗細砂粒を含む。

10は高坏の坏部下半片。摩滅のため器面が薄く剥離し、調整等は不明だが、外面屈曲部には僅かに稜を観察できる。色調は赤褐色で、胎土は極めて精良。11は小型丸底壺の口縁部片。風化のため詳細な調整は不明。色調は灰褐色～橙褐色を呈し、胎土は精良。

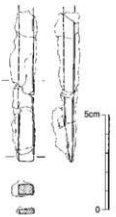
12～14は混入品と考えられる弥生土器。12は甕の口縁部で、内端部は突出し、外端部はやや垂下す

る。風化が著しいが、調整はナデであろう。13は甕の底部片。平底を呈し、底径は7.8cmに復元できる。調整は外面がハケ目、内面はナデを施す。14も甕の底部資料で、復元底径は8.6cm。調整は内面はナデで、外面は不明。

なお、当住居跡からは、混入品として須恵器の小片も出土している。小片のため図化していないが、6世紀のものであろう。

鉄　器（図版4、第7図）

鑿状鉄器であり、住居跡の床面から25cm程度浮いた状態で出土した。基部が欠損しており、残存長9.95cmを測る。横断面形は長方形で、最大厚0.55cm。幅は基部側、刃部側ともに0.8cm程度と一定である。



第7図　竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

（2）ピット

遺構と考えられるピットは調査区北西で検出した1つのみで、他は樹根等である。平面形は25cm前後、深さ45cmとしっかりしている。

土器片が1点出土したが、小片のため詳細は不明。弥生土器か。

Ⅳ まとめ

当遺跡は春日市の西部から福岡市南区に所在する台地に展開する複合遺跡で、２次調査地は台地の東斜面にあたる。また、過去の試掘・確認調査では、当地より南側では遺跡が確認されておらず、川久保Ｂ遺跡の南限と考えられる。一方、西側の福岡市側は、大部分が学校法人福岡女学院の敷地となっており、福岡市の分布図による弥永原遺跡群とされている。弥永原遺跡群は、かつて曰佐原遺跡と呼ばれており、校舎造成時に内行花文鏡が出土したために行われた発掘調査では、弥生時代中期～後期の墳墓群が確認された。中でも、後期の墳墓群からは、内行花文鏡、鉄器、玉類が出土している。さらにその後の調査では、ガラス勾玉鋳型が環濠から出土し、弥生時代後期の集落も確認された。

川久保Ｂ遺跡２次調査は、極狭い範囲であったために、古墳時代前期の竪穴住居跡と時期不明のピットを確認したに過ぎないが、住居跡の覆土からは弥生土器や古墳時代後期と推察できる須恵器片も出土している。このことは、住居跡の周辺には、少なくとも弥生時代と古墳時代後期の遺構が存在することを示すものであり、１次調査の結果とも整合する。１次調査の成果や立地を考えても、川久保Ｂ遺跡と弥永原遺跡群を同一遺跡群として捉えても問題なかろう。

竪穴住居跡は、全体の1/2強を調査することができた。平面は長方形プランで、２本柱、壁際には屋内土坑も検出した。２ヵ所でベッド状遺構を確認したが、西隅のものは痕跡程度しか残存しておらず、住居廃絶前には機能していなかったと推測される。主柱穴にも新旧が見られることから、建て替え時にベッド状遺構についても造り変えた可能性があるのではなかろうか。

出土した土師器は、甕の口縁部が複数あるが、小片が多く、しかも床から浮いた状態であった。このため住居跡の時期を確定するまでにはいたっていない。しかしながら、屋内土坑から出土した甕の胴部から考えて、概ね久住編年のⅡＢ期に比定することができよう。

なお、当住居跡からは鑿状の鉄器も出土している。出土地点は床面から20㎝以上浮いた状態であるため、当住居跡に伴うものかは疑問がある。

川久保Ｂ遺跡は、近年ようやく発掘調査が実施され、その性格が明らかになってきた遺跡である。遺跡の分布状況から考えても、その中心は台地の尾根部に当たる福岡市側であろう。南に位置する前方後円墳である下白水大塚古墳と集落の関係や、弥生時代の墳墓、集落等今後の調査が期待される遺跡である。

参考文献

福岡県教育委員会　1965『福岡県弥永原遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書第32集

福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会　1967『福岡市弥永原遺跡調査概要』

福岡市教育委員会　2004『弥永原遺跡５』福岡市埋蔵文化財調査報告書第830集

久住猛雄　1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX

図　　版

（1） 川久保Ｂ遺跡２次調査区全景（北東から）

（2） 竪穴住居跡（南東から）

図版 2

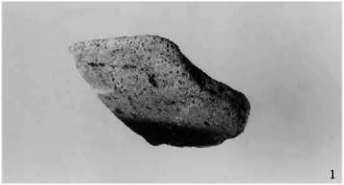
（1） 竪穴住居跡東西土層

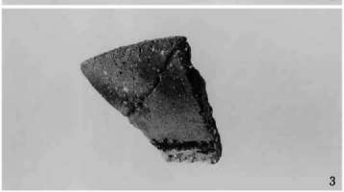
（2） 竪穴住居跡南北土層

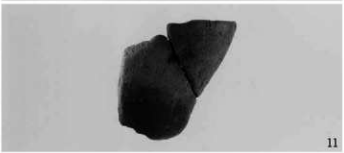
（1）竪穴住居跡炉跡半裁状態（南西から）

（2）竪穴住居跡P1断面土層（北東から）

（3）竪穴住居跡P2断面土層（北東から）







竪穴住居跡出土土器・鉄器

報告書抄録

ふりがな	かわくぼびーいせき
書名	川久保B遺跡　－２次調査－
副書名	福岡県春日市下白水北所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第65集
編著者名	井上義也
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816－8501　福岡県春日市原町３丁目１番地５　℡　092－584－1111
発行年月日	西暦2012年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
川久保B遺跡（かわくぼびーいせき） ２次調査（にじちょうさ）	福岡県春日市（ふくおかけんかすがし） 下白水北５丁目（しもしらみずきた　ちょうめ） 120番地他（ばんちほか）	40218		33° 31′ 50″	130° 26′ 31″	2005.11.7 ～ 2005.11.16	22.96	個人専用住宅建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川久保B遺跡 ２次調査	集落	古墳時代	竪穴住居跡　１軒	土師器 鉄器	古墳時代前期の集落の一角

要約

川久保Ｂ遺跡は春日市西部の台地上に立地する。当遺跡周辺は、市内でも開発が比較的早かったために埋蔵文化財の詳細については不明な地区であった。近年、調査例が増加しており、弥生時代から歴史時代に及ぶ複合遺跡であることが明らかになってきている。また、当地は福岡市との市境付近でもあり、隣接する福岡市の弥永原遺跡群と同一遺跡とも考えられる。今回は狭小な調査であったが、台地の東緩斜面において古墳時代前期の住居跡を調査することができた意義は大きい。

川久保B遺跡 2
—2次調査—
春日市文化財調査報告書
第65集

発行日　平成24年3月31日
発　行　春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印　刷　株式会社　昭和堂　九州支店
福岡県福岡市博多区東比恵4-2-10